

野殿とも呼べり。本庄太郎兵衛宗正の女なり。元祿十五年三月九日從一位に叙せられ、後桂昌院殿と稱す。心岩は寶永三年八月晦日増上寺山内心光院に於て遷化すといへり。

○大圓寺地藏堂

五尺餘の石像にて、寺傳に、此の地藏尊は元と大乘寺別れ道にありし石像なりといへり。光嚴寺普門禪師の地藏靈驗新記には、此の石像は寛文中に大圓寺二世仰譽上人の造立する處也。靈驗多く聞ゆ。或は病痾或は危難に遭ひて祈願するもの、其の算を知らずとて、靈驗ありし傳話共をば種々記載せしかど、今爰に略記す。本書を見てその靈驗を知るべし。

○本唱山法光寺

法華宗也。貞享二年の由來書に云ふ。當寺開基天正九年於越中國守山了覺院日養建立。從本寺京都本國寺寺號本尊申請、瑞龍公御局守山にて御内意を以常々祈禱被仰付。其後守山より金澤へ引越。其節も御局を以、二代目住持日詮寺地之儀奉願處、則泉野今之寺地拜領被仰付。其頃御判物並御寄進狀等被下、所持仕處、元和九年二月自火に而悉く燒

失仕。とありて、今は舊記等傳來せずといへり。

○鶴雲山長久寺

曹洞宗也。延寶二年の由來書に云ふ。當寺開基、藩祖大納言利家卿御妹高昌石見守定吉之後室長久院殿。慶長十三年建立被致、石川郡田井村化粧田三十石爲寺領寄附被致。承應四年高五十石に被定、五十石之内七石五斗茶湯料、殘高破損修理料に被成置。とあり。寛延二年の由來書には、慶長二年の開基にて、開山は愚庵和尚也。愚庵は當地栖覺寺と云ふ寺の隱居也。當寺之寺地は元と石川郡白山に有之處、開山愚庵和尚金澤に栖覺寺と云ふ寺有之砌、栖覺寺より白山へ隱居致し、草庵を結び居住之處、長久院殿久壽大姉之位牌所に被取立。其頃は高昌氏元祖石見守白山に在城之處、其後金澤へ被出に付、寺も引越、高昌甲斐下屋敷に罷在候。然處寛永十二年に御用地に成、被召上、同年爲替地、泉野寺町玉泉寺前に於て三百十六歩、小塚藤右衛門・奥村源左衛門奉行にて被打渡、寺造營致し候處に、久壽大姉位牌堂建立に付、右寺地手狭に有之故、延寶四年先住關徹より、寺社奉行永原左京・篠原織部へ、日蓮宗覺源寺上り屋

敷申立、先屋敷歩數三百十六歩拜領、殘地六百五十八歩請込に致し、于今居住仕。とあり。按ずるに、延寶の金澤圖に、

覺源寺と記載し、前口二十九間三尺奥行三十六間四尺とありて、長久寺いまだ此の地へ移轉せざりし頃の繪圖なるべし。又栖覺寺は、三壺記に、高昌石見内室は、利家卿の御妹にてまします、慶長十四年に御死去被成、金澤大豆田村栖覺寺にて葬送被成。御戒名長久院殿珍亭久壽大姉と號し奉り、其の寺を長久寺と名付け、高昌平右衛門下屋敷に寺建立有つて、百五十石の寺領を被付置處、後には右寺領を高昌五郎兵衛に被遣、五郎兵衛方より十五石宛長久寺へ茶湯料に遣しける由。と見ゆ、本藩歴譜にも同じやうに記載すれば、前顯寛延二年の由來書の傳説は過聞ならんか。又三壺記に、寛永三年兒小姓衆喧嘩の條に、玉井主水は十二三の頃、高昌左京下屋敷の長久寺へ毎日登山して、手習すと見ゆ、又寛永六年鬼川喧嘩の條にも、村瀬四郎右衛門は新藏と申し、坂井市郎右衛門は權八とて、長久寺にて手習すとありて、寛永十二年までは大豆田高昌氏の下邸内に寺ありしこと知られけり。栖覺寺は長久寺の前寺號

也。

○長久院殿小傳

長久院殿は、前田縫殿助利春君の第二女にて、舊藩祖大納言利家卿の御妹なり。天文十二年癸卯尾張國荒子にて誕生、御名を津世と呼べり。初め前田源介に嫁娶せられしかど、永祿元年に源介戰死す。故に高昌石見守定吉に再嫁し給へり。定吉卒後落飾し、久壽尼公と稱す。慶長十五年八月三日卒せらる、于時六十八歳。長久院殿椿庭久壽大姉と號し、大豆田村栖覺寺境内に葬る。栖覺寺を後長久寺と改稱して、位牌を置かれたり。辭世の詠歌、于今寺寶となしたり。其の歌如左。

しきさうをはらひつくせば無一もつ

たゞ夜嵐に谷川の聲

おもはずや知りて聞きぬる鳥の聲

われをわすれて言の葉もなし

生ずるも死するもおなじ花紅葉

ひらくもちるもとの一露

ゑしやちやうり何を歎かん世の中を